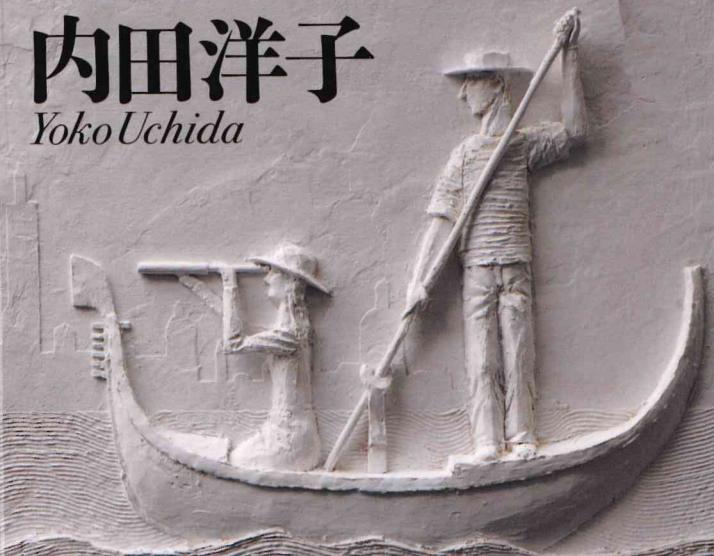


# 対岸のヴェネツィア

## 内田洋子

*Yoko Uchida*



本書を読むと、  
登場する人々を通して  
町の雰囲気を味わう  
ことができる。まるで、  
パラレルワールドに  
入り込むかのようだ。  
(解説より)

イタリア文化会館館長  
パオロ・カルヴェッティ

名手が  
いざなう  
幻都の  
風景

伊日財團  
ウンベルト・アニエッリ記念  
ジャーナリスト賞受賞!

対岸のヴェネツィア

内田洋子



集英社文庫

## 解説

パオロ・カルヴェッティ

いにしえの時代から、イタリア半島では洗練された多様な文明が出会い発展を遂げてきた。今のイタリア文化は古代ローマやローマ帝国から連綿と続く歴史の上にあると広く考えられているが——多くのイタリア人が自分は古代ローマの「末裔」であると考えている——、それ以前に、今日私たちが「イタリア」と呼ぶこの地にはサビニ人、ラテン人、エトルリア人、フェニキア人、ギリシャ人、ケルト人が居住し、あるいは植民都市を築いていた。そして、豊かな文化が育まれ、多彩な芸術が生み出されていった。それを考へると、十七、十八世紀にヨーロッパの裕福な貴族の子弟が古代文明などを学ぶためにヨーロッパ大陸を長期間旅行していたグランドツアーブームの時代から、今日なら「カルチャーツーリズム」と呼ぶ旅の行先として、イタリアが好まれるようになつたのも驚くべきことではない。ヨーロッパの知的な若者たちが旅中に見聞したことから「イタリアの古代文化遺産」のイメージが作られ、芸術や考古学的遺産の背後に広がる美しい自然も広く知られることとなつた。とりわけ十九世紀以降は、ロマン主義の広がりといい自然も広く知られることとなつた。とりわけ十九世紀以降は、ロマン主義の広がりとい

ともに、作家や詩人たちがイタリアについて書き、世界の文学史に残る傑作も生まれた。イタリアを訪れ、筆を執った多くの作家のなかでもつとも有名なのはゲーテとスタンダールだろう。スタンダールは『イタリア旅日記』（ローマ、ナポリ、フィレンツエ）（一八二六）で、芸術に圧倒される様子を書いている。日々、感嘆と驚愕の連続で眩暈にも襲われ、後に「スタンダール症候群」という用語さえできている。『イタリア紀行』（一八六一—一七、二九）の作者、孤独な旅人ゲーテは、ヴェネツィアの人目につかない町角を散策しながら、運河や路地、ティツィアーノやヴェロネーゼの絵画が飾られた建物に心を奪われている。町が汚くゴミの収集が非合理的だと非難しているが、町全体への称賛に比べれば些細なことだ。このドイツの作家は幼少の頃には、父親からヴェネツィアの話を聞かされ、イタリア土産のゴンドラの模型で遊んでいたのだ。

ヴェネツィアは、実に特異な場所である。多くの作家がこの町から着想を得て、舞台にした作品を著してきた。詩人バイロンは『ヴェネツィア頌歌』（一八一九）で、その頽廃を詠んでいる。目にした町はすべてが衰退に向かっているようだが、内在する美しさや榮華を誇る過去の記憶にバイロンは惹かれた。しかし、ジョン・ラスキンは『ヴェネツィアの石』（一八五一—五三）で、連帯感や名譽といった価値観が市場の論理に取つて代わられた当時の社会を批判するため、ヴェネツィアを取り上げた。この町は、時

に、芸術の衰退や人間の倫理の低下のメタファーとなるのだ。ヴェネツィアをすべて肯定的に捉えた作品は、二十世紀初頭のヘルマン・ヘッセによる「ヴェネツィア・ノート」を待たなければならない。このエッセイのなかのヴェネツィアは、バイロンやラスキンが記したヴェネツィアではない。また、マルセル・ブルーストの傑作では、主人公が「失われた時を求めて」追憶する、哀愁漂う陰鬱な場所として描かれている。彼はある朝パリで敷石につまずいた瞬間、一九〇〇年に母親と訪れたヴェネツィアのサン・マルコ広場で足を取られた時の感覚を思い出すのである。

もちろん、日本人にもイタリア旅行記やヴェネツィアについて執筆した人はいる。初めての本格的な記述は、一八七三年にイタリアに到着し、ヴェネツィアに七日間滞在した岩倉使節団による『特命全権大使 米欧回覧実記』（一八七八）だろう。『実記』には、町並みや旅の行程、訪れた建物について書かれているが、驚かされるのはその詳細な記述というより、内容が今の日本人が持っていく旅行ガイドとほとんど同じだということだ。つまり、十九世紀の終わり頃には、広く認識されたヴェネツィアのイメージがあり、町の「読み解き方」がすでにできあがっていたことになる。使節団以前にアルプスを越えてやってきた人たちが受けた印象が、その後、町を表す特徴となり、地元の人たち自身が来訪者に——この場合は日本の人々に——その美しさや魅力を伝える時、こうした

表現を使うようになっていた。

ゲーテの好意的な見方にしろ、頽廃を強調したラスキンの捉え方にしろ、解説モデルに影響を受けた日本人は他にもいた。『イタリア古寺巡礼』（一九二八）を著した和辻哲郎は、イタリアへの旅の終わりにヴェネツィアを訪れ、そこで病を得る。意氣消沈する和辻に町は陰鬱に映り、彼に先んじて訪れたヨーロッパの作家たちと同じような憂いを含んだ文章が綴られている。また、イタリアを舞台に歴史小説を書いてきた塙野七生は『海の都の物語』（一九八〇一八一）で、その榮華と変遷を描いた。読者は、深い考察に基づいた魅力的な物語のなかに、総督が統治するヴェネツィア、シェイクスピア風の商人、放蕩三昧のジャコモ・カサノヴァが通った貴族の館など、長い間語られてきたヴェネツィアのイメージを見いだす。

さて、内田洋子さんの『対岸のヴェネツィア』を読み始めると、いわゆるヴェネツィア「日記」から想像できるものとはまったく違った作品だということがわかり、驚きを覚えた。それは、「外」からやってきた著者に先入觀を持っていたからではない——実際、多くのイタリア人やヴェネツィアの人たち自身が今もなお、この町の「秘密」や「知られざる町角」を書き、その名を世界に知らしめた歴史上の人物をめぐる物語を書いている——。そうではなく、この本が内田さんを日常に招き入れた地元の人たちとの

出会いを通して得た数々の発見に満ちているからだ。この点では、著者とヴェネツィアの町との関係は、例えば須賀敦子が内省的な文章で『ヴェネツィアの宿』に著したそれは大きく異なっている。須賀の作品では、町は自らの生活やヨーロッパの旅、日本の家族、そして父親との複雑な関係といった記憶を語る時の背景となつていて。

内田さんはヴェネツィアとの出会いを、住民との出会いとして語っている。隣人、美術館内のショップの店員、同じ地区に暮らす建築家、ドイツ人の友人。長年ヴェネツィアに暮らすこの友は、町の魅力に取りつかれ移住してくる人たちの典型だ。さらには、店のオーナーや国立公文書館の迷路を案内する司書など。そして、日々触れ合う人たちとの会話から、思いがけず訪れる事になる場所の数々。誘われたコンサートの会場は、外国人があらかじめチケットを予約してから行くあのフェニーチエ劇場ではなく、ある教会だ。そこで聴くのは音楽へ情熱を惜しみなく注ぐ愛好家の合唱である。郷土料理を楽しむのは、観光客相手にそれらしい食事を提供する大衆食堂でも、美味しいが値張る高級レストランでもない。作り方や材料の選び方まで教えてくれる友人の作る料理で、だ。

内田さんが住まいに選んだのは——あるいは偶然の巡り合わせだろうか——、六つの地区(セステイエーリ)からなるヴェネツィア本島の隣にあるジュデッカ島である。本島からは船で行く。ヴァポレット(水上バス)が一日中運航しているので容易く渡れる

が、ジュデッカ島はどこへでも歩いて回れる本島とは運河によつて隔てられている。ヴェネツィアの一部だが、本島を正面に臨む。素晴らしい眺めを堪能できると同時に、住民の日常生活についてじっくり考えを巡らすだけの距離があるのだ。ゴンドラの船首には鉄製の装飾があるが、六つの地区を表す櫛歯のような六本が外側に向いているのに対し、ジュデッカ島を象徴する一本だけが反対を向いているのは偶然ではない。これが内田さんが描いた『対岸のヴェネツィア』、ジュデッカ島だ。ヴェネツィアを観察するには恰好の場所であり、内田さん自らの経験のメタファーでもある。内田さんは観光客でも行きずりの旅人でもなく、この町に暮らし、日々の現実に深く入り込んでいる。しかし、外からの来訪者であり、もしかしたら特異性に閉ざされたこの町で営まれている生活を対岸から観察しているということなのかもしれない。

イタリア語に長けた内田さんだからこそ、外からの観察者としての視点を持つつつ、唯一無二のこの町の日常をよく理解できる。大いなる歴史を誇り、遺産を保存していく責務を自覚する一方で、観光に押しつぶされ町のアイデンティティさえ危険に晒され、観光以外の新たな生産活動をなかなか見いだせずにいるという大きな矛盾を抱えた、この小さな町の日常を。内田さんは家探しに向かう電車で同乗した地元の人たちの話を聞き、高潮による冠水警報やゴム長靴なしでは歩くのもままならないことを知る。これがヴェネツィアなのだ。つまり、この地で暮らしながら、この地で生まれ育った人たちと

の交流によつてのみ知りえることを少しづつ手に入れなければならない。ヴェネツィア方言では、外から来た、その土地の習慣を知らない人を指して、しばしば「フォレスト」(Forest)——「外人」「賓」の意味で、必ずしも軽蔑語ではない——と言う。この本で描かれているのは、ヴェネツィアを理解しようと注意深く観察し、住民の暮らしを理解する、まさに「フォレスト」としての発見だ。人々の生活には幾世紀にも亘つて継承された習慣も最近の悪習もある。その両方に気付くかどうかが、居住者と、旅行者や滞在者との違いだ。私が『対岸のヴェネツィア』に惹かれたのは、個人的な経験に通ずるこの点にあつたのかもしれない。私はカ・フォスカリ大学で教鞭を執るため二〇一一年に家族とともにヴェネツィアに転居し、現在も居を構えている。暮らし始めて目の当たりにしたことが、内田さんの本には書かれている。例えば、家探しの時は、この町が杭の上に造られていることを考えなければならない。ともすれば、高潮で浸水してしまうかもしれないからだ。しかし、正しい選択をすれば、「窓枠を額縁にしたヴェネツィア」というこれ以上ない景色を堪能できる。路地をさまよい、道に迷つた時、思いもよらない光景に遭遇する。青果を積んだ小船で売られていた「アーティチヨーケの尻」を見つけた時のように、見知らぬ者どうしでも日常を分かち合う。ヴェネツィアには、新型コロナウイルス感染症が拡大する前、年間二千五百万人の観光客が訪れていたが、その一方で住民は五万人にも満たず、毎日、同じバールや同じ書店、同じ町角でヘルワールドに入り込むかのようだ。

『対岸のヴェネツィア』は、さまざまなお会いを通してヴェネツィアを知る、そういう本だ。出てくる観光名所も、人々の生活の断片を語る背景をなしているに過ぎない。実際、私たちが訪れた場所を記憶しておく時、それが出張であれ、休暇あるいは外国での長期滞在であれ、触れ合つた人との思い出に強く結びついている。

『対岸のヴェネツィア』を読むと、登場する人々を通して町の雰囲気を味わうことができる。まるで、地元の人たちに案内され、家を囲む高い壁を乗り越えた先に現れるパラヘルマン・ヘッセは「ヴェネツィア・ノート」で書いている。「ヴェネツィアへの熱い想いはさておき、ヴェネツィアを眺め尽くした私が、八日間トルチエッロの漁師と小舟に乗り、寝食をともにしなかつたら、ラグーナは物珍しく、なじみのない、風変わりで不可解なものであり続けただろうか。」[中略]あの八日間をティツィアーノやヴェロネーゼの作品を見ることに費やすこともできただろう。しかし、アカデミア美術館やドゥカーレ宮殿ではなく、金色がかつた暗褐色の三角帆の漁船の上でこそ、ティツィアーノやヴェロネーゼを理解できたのだ。絵画だけではなく、町全体はもはや威圧的な美しい現実なのだ』。(注1)

内田れんも同じように、日々の経験を受け止め、人々との出会いに導かれ、ヴェネツィアを「生きる」。そして書かれた『対岸のヴェネツィア』は、今まで幾度となく繰り返されてきたありきたりの語りとは異なるところへと読者を誘うのだ。

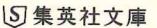
(パオロ・カルヴェッティ イタリア文化会館館長)

注1 「Über das Reisen」「ディー・ツァイト紙」一九〇四年四月二二〇日号掲載「Über das Reisen」伊語版から一部、筆者訳。

本書は、一〇一七年十一月、集英社より刊行されました。

初出

文芸WEBサイト「レンザブロー」二〇一六年八月～二〇一七年三月に掲載の「ヴェネツィア暮らし」を、加筆修正の上改題しました。



たいがん  
対岸のヴェネツィア

2020年7月25日 第1刷

定価はカバーに表示しております。

著者 うちだようこ  
内田洋子

発行者 徳永 真

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10 〒101-8050

電話 【編集部】03-3230-6095

【読者係】03-3230-6080

【販売部】03-3230-6393(書店専用)

印刷 図書印刷株式会社

製本 図書印刷株式会社

フォーマットデザイン アリヤマデザインストア

マークデザイン 居山浩二

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁(本のページ順序の間違いや抜け落ち)の場合はお取り替え致します。ご購入先を明記のうえ集英社読者係宛にお送り下さい。送料は小社で負担致します。但し、古書店で購入されたものについてはお取り替え出来ません。

© Yoko Uchida 2020 Printed in Japan  
ISBN978-4-08-744138-3 C0195